

## 十字架を負って従う

マタイ 16:21-28

## 1) クリスマンとは「イエス・キリストは私の救い主と告白する者」

人はどのようにしてキリストを信じ、キリストに従うものになるのでしょうか。聖書に「今は恵みの時、今は救いの日です。」(コリント第二 6:2) とあるように、ある日、ある時にイエス・キリストを心に受け入れるのです。伝道集会で招きにに応じてイエス・キリストを受け入れた人が多くいると思います。個人伝道や聖書研究会、信仰入門クラスで信仰に導かれた人もいると思います。私の神学校時代のクラスメートは牧師の子どもで神に祈り、イエス・キリストを信じることに何の抵抗もなく、信じた時から自分は牧師になると思っていたという人もいます。中にはいつ自分はイエス・キリストを信じたのか分からないという人もいるかも知れません。そんな場合は「今、イエス・キリストを信じている」ということを大切にすると良いかと思います。このように様々な信じ方があると思いますが一言えることは誰でもあるとき一瞬にして信仰を持つようになったのではなく、そこにいたるまでいくつかの段階なりプロセスがあったということです。幼いころクリスマンの幼稚園に通っていた、学生時代に聖書を読んだことがある、クリスマンの友人がいたなどの言わば準備期間があり、そこからいくつかの決断を積み重ねてイエスを信じる信仰に至ったということが多々あると思います。

主イエスの弟子のペテロも同じような段階を経て信仰に導かれています。ペテロが最初イエスに従ったのは、弟アンデレに誘われてのことでした。ペテロは自分からイエスのところに行ったわけではありませんが、イエスに出会ってたちまちイエスの教えにひきつけられ、イエスを自分の師として付き従うようになりました。そればかりでなく、イエスのなされた奇跡を何度も目の当たりにして、イエスをたんなる教師以上のお方として認めるようになりました。そして、ついに、今日のマタイ 16:16 の「あなたは生ける神の御子キリストです。」という信仰の告白に至るようになったのです。

では、私たちは「イエス・キリストは私の救い主です。」という信仰を告白できたら、もうそれ以上進む必要はないのでしょうか。そこがゴールなのでしょう。そうではありません。神に背を向けていた過去の状態はすべて「マイナス」の状態であって、イエス・キリストを信じて、聖霊により、神のこどもとして生まれかわることは、「マイナス」の状態を脱却して、やっと「ゼロ」の状態になったにすぎません。私たちはそこから「プラス」に向かって成長していくのです。私たちを救い出し、霊的な意味で生んでくださった父なる神も同じように、私たちが自分の足で信仰の歩みができるように、神のことばの固い部分もしっかり理解できるように、そして自分のことばで祈り、人々に福音を語るができるように期待し、願っておられるのです。

## 2) クリスマンとは「十字架を負って従う者」

神は無限のお方ですから、神を知る知識も無限に成長するものです。だれひとり「これだけ神について、聖書について知っていたらもう大丈夫」と言うことはできません。「新しい誕生」はゴールではありません。それは出発点です。生まれ変わりのしるしであるバプテスマ(洗礼)は卒業のときではなく、キリストの弟子となってキリストの学校に入る入学のときなのです。おそらくキリストの学校には卒業というものはないのかもしれませんが、信仰の成長は生涯にわたるものです。

そして、このキリストの学校で学ばなければならない最も大切なことは「十字架を負うこと」です。イエスはこれからエルサレムに行き、そこで、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえると話されました。それを聞いたペテロは、イエスをそばに呼び寄せて、イエスをいさめ始めました。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」マタイ 16:22 するとイエスはペテロのほうに向きなおって「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」マタイ 16:23 と言われました。つい先ほどイエスはペテロに対し「あなたは幸いです。・・わたしはこの岩の上に、わたしの教

会を建てます。・・わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。」マタイ 16:17-19 と言われたばかりなのに、今度は「下がれ。サタン。」なのです。ペテロは最大級に高く評価されながら、すぐにサタン呼ばわりをされたのです。これは、弟子であるペテロが主であるイエスをいさめるという失礼なことをしたのでイエスが怒られたというわけではありません。むしろペテロがそう言ったのはイエスのことを思っていたことだったことは、イエスもご存知だったはずですが、しかし、それが愛の心から出たものであっても、イエスがこれからはそうしておられる十字架の贖いの道を妨げるものは、サタン、神の敵だと、イエスは言われるのです。

憎しみや争いが神のみこころに反することは誰にもわかります。ところが、愛や親切も、それが人間的なもので終始してしまうとき、神の敵となってしまうことがあるのです。余計なお節介どころか神をさらに遠ざけてしまうこともあるのです。イエスはペテロを「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と言ってお叱りになりました。しかしよくよく考えてみれば、なんと私たちは「神のこと」でなく「人のこと」、つまりこの世の基準でものを考え、地上での利益を優先させ、人間的な方法に頼っていることかと思わされます。親の過保護、過干渉がかえって子供の成長と自立を遅らせているのと似ています。神のご計画から物事を見、神の方法で、神の力によってそれを成し遂げようとするのがなんと少ないことでしょうか。それは神に対する基本的な姿勢がどこかでずれてしまっているのです。

それでイエスは弟子たちに「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」マタイ 16:24 と言われたのです。「十字架を負う」という表現は時々聞かれたことがあると思いますが、一体どういうことなのでしょう？ これは一般に考えられているように、大きな重荷を背負って人生を歩むことではありません。そのことの意味は、前の節に書かれている「神のことを思わないで、人のことを思う」のとは逆の歩みをすることです。つまり、人間的な成功を求めそれを誇ったり、人を喜ばせるために真理をまげてしまったり、人に受け入れられようとしてみこぼを曖昧に扱ったりするのではなく、神のみこころが成るように願い、人間的な栄誉ではなく神の栄光を求め、真理の光を絶えず求め、神の真理を喜ぶことなのです。「自分を捨てる」ということはやや豊かそうに見えるものを捨てたり、出来るだけ何も持たないように質素に生きるということではありません。それは悪いことではありませんがピント（焦点）がずれています。そんなことをしたらまた新たな律法学者のような人が増えるだけです。そうではなく、たとえ、目に見える大きな重荷がなく恵まれた生活をしているように見える人であっても、その恵まれた生活を自分が楽しむだけで終わらず、それを神のために役立つことが、「十字架を負う」ことになるのです。つまり神のことを人のことよりも思っているということが十字架を負って生きるということの意味することです。もっとも、恵まれていると見える人にも、ある人にとってはそう見えるだけでそれぞれに必ず神は負うべき重荷を与えておられます。ですから他人のことよりも神が自分に与えられた重荷に気付くことは大切なことです。すべての人はなんらかの重荷を持ち、しかもそれと戦っています。このように言うことが出来ます。人は重荷を持つことによって、あるいは、自分に与えられた重荷に気付くことによってはじめて「人のこと」から「神のこと」へと目をむけ、自分の力によってではなく、イエスに従うことによってその重荷を負うことができるということが分かるようになるのです。

「十字架を負うこと」は「自分を捨てること」つまり「自分に死ぬこと」ですが、それは否定的なものではありません。それは積極的なものでもあります。創造的破壊と言いましょか古い自分が死ななければ、神によって与えられた新しいいのちが成長しないからです。イエスは言われました。「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。」マタイ 16:25-26 なんと多くの人が地上のもの、一時的なものにしがみついて、まことのいのちを見失い、永遠のいのちの喜びを失っていることでしょうか。歴史

上、全世界をわがものにしようとした独裁者たちがすべて惨めな末路をたどったことは良く知られていることです。彼らは一時的に自分の思い通りのものを手に入れたかもしれませんが、まことのいのち、永遠のいのちを持っていません。というよりも神はそのような者に永遠のいのちをお与えにはなりません。永遠のいのちは地上のどんなものをもって買おうとできないものです。たとえ人間的な成功を収め、楽で楽しい生活ができたとしても、それは決して長くは続くものではありません。私たちはこの地上にいつまでも生きて、その成功や安楽な生活を楽しむことはできないのです。地上のものはやがて朽ちていきます。まことのいのちを持たないなら、私たちも地上のものと一緒に滅びてしまうのです。しかし、まことのいのち、永遠のいのちを持つ者はこの地上を神によって生かされ、神のために生きます。そして地上を去った後も、神とともに生き続けるのです。

自分のためではなく神のために生きる、地上のいのちによってでなく永遠のいのちで生きる、それが自分の十字架を負うことなのですが、そんなことが私たちに、果たしてできるのでしょうか。もちろんそれは、人間の力でできることではありません。しかし、イエスにあってはできるのです。なぜならイエスは私たちに先立って、私たちに代わって、十字架を負ってくださったからです。このイエスの十字架が自分のためだったということをまごころから信じるなら、私たちもイエスとともに十字架を負うものとされるのです。ガラテヤ 2:19,20 にある「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」とパウロは告白しました。イエスの十字架は私のためであると自覚して、自分の重荷を負ったまま、キリストに従う時に主は弱く小さな私を用いて神の栄光を顕して下さるのです。私のすることと言えば何か行動するのではなく、まず主イエスは私の身代わりとして十字架につけられ、私の罪の罰を受け、死んでくださったことを信じることです。信仰の道は十字架に向かう道です。この道を歩みましょう。互いに励ましあって共に進みましょう。